

アメリカスポーツと人種

一日米両国における研究の動向と展望一

川 島 浩 平

はじめに

アメリカスポーツは人種偏見や差別とは縁のない世界であると見なす風潮が今日優勢である。日本ではアメリカというと人種差別を想起するものも少なくないが、その日本においてさえ、スポーツ界だけは例外であると見なす向きがある。その根拠の一つは、三大プロスポーツ（野球、アメリカンフットボール、バスケットボール）における黒人選手の多さである。三者の全国組織である MLB (Major League Baseball), NFL (National Football League), NBA (National Basketball Association) に所属する現役選手に占める黒人の比率は、1996年時点で17%, 67%, 80%であった¹⁾。もっとも低率の MLB でさえ、全人口に占める黒人の比率である約12%を優に凌いでいる。NFL では過半数をはるかに超えている。NBA に至っては5人に4人が黒人選手であることになり、独占状態に近い様相を呈している。苛酷な被差別体験を重ねてきた黒人のこれほどの台頭は、政界、財界、学界など他の領域に類をみることができない。このことから、スポーツ界が相対的に見て人種偏見や差別にとらわれていないということは可能である。

もう一つの根拠はほかでもない。2001年のメジャーリーグ・ペナントレ

ースにおけるシアトル・マリナーズのイチローの活躍である。彼は、アメリカ球界が肌の色の違う新参者にも開かれていることを、身をもって実証したといえるだろう。実のところ、アメリカでの入団当初の下馬評はそれほど高くなかった。「3割2分から3分は打つ」という予想が、ピネラ監督とアダマック副社長には「“ひいき目”程度にしか伝わらなかった」と伊東一雄は回想している²⁾。しかしイチローは、新人王、盗塁王、首位打者、さらにリーグ MVP まで獲得して、メジャーリーグの頂点を極めたのである。イチローの走攻守三拍子そろった見事なプレーと同様、人種の異なる人間を快く受け入れ、栄冠を与えたアメリカ球界のフェアプレーにも、私たちは拍手を送るべきであろう。

しかしアメリカにおけるスポーツ研究の成果に照らすならば、これらの観察は極めて皮相的であり、スポーツ競技者、管理者、そして経営者の歴史的、現在の経験とかけ離れたものであることが明らかとなる。スポーツ研究者は過去数十年間、それまで支配的だったナイーブな楽観論を打破し、新たなスポーツ観を構築すべく精力を注いできた。その結果、人種偏見や差別が過去と現在において、アメリカスポーツ界の秩序や構造と切り離すことのできない見地や行為であることが暴かれたのである。しかし残念ながら、日本の学界はこのような成果をいまだ十分には吸収していないようにみえる。

本稿は、アメリカの学界における最近の研究動向を概観し、日本の学界に対する影響の度合を考察することで、我が国のアメリカスポーツ研究がとるべき方向について一つの示唆を与えることを目的とする。第一節ではアメリカにおける社会学の動向を機能主義、紛争理論、批判理論などの枠組に沿って整理する。第二節ではアメリカの歴史学研究成果に基づいて、スポーツ界の過去と現在における差別の実像を捉えたい³⁾。第三節では日本における研究動向を分析し、アメリカの動向と対比することでその特色を抽出する。以上を踏まえて、日本人研究者がこれからとるべき方向について付言することで結びとしたい。

第一節：アメリカ社会学界における理論的展開

ジェイ・コークレーは、スポーツ社会学の研究動向についての考察の中で、1950年以前の特徴を次のように指摘する。当時はスポーツが健全な人間性や人格の発達に貢献するという信念—近代オリンピックの創始者であるピエール・ド・クーベルタン⁴⁾の有名な言葉を借りるなら、「健全なる精神は健全なる肉体に宿る」という信念—が、一般人、研究者を問わずひろく浸透していた。そしてこのような立場に対する批判的な検討はほとんど見られなかったという⁴⁾。いわば「性善説」的スポーツ観が支配的な時代だったといえるだろう。馬場哲雄による調査も、類似した傾向を明らかにしている。1900年から1950年の間にアメリカで出版された体育・スポーツ研究には、スポーツが「公正、忠誠、克己」などの徳目を育成できるとの認識が共通していた⁵⁾。そして1950年代になって初めて、変化の兆しが見られたというのである⁶⁾。両者の記述は、新しいスポーツ研究の黎明期が、アメリカの場合1950年代にあったことを示唆している。

それでは新たなる潮流は、どのような展開をみせたであろうか。まず性善説的スポーツ観が、社会学研究によっていかに継承され、理論的な武装を固めたかについて言及する必要があるだろう。この流れを汲む立場は、一般市民の間になお根強く残るナイーブなスポーツ観に学術的な根拠を与えるものとなっている。社会学ではこのような学説に「機能主義」というラベルを与えている。

機能主義の思想的由来は、社会学の創始者オーギュスト・コントにまで遡るとされる。その後エミール・デュルケムによって理論として整備され、アメリカではタルコット・パーソンズやロバート・K・マートンに受け継がれた。アメリカ社会学では長く最も支配的な理論的枠組とされてきた。社会学の学徒がいかなる理論的枠組を学ぶ場合も、まず出発点になるのが機能主義であるとさえいわれる⁷⁾。

機能主義では、社会は相互に関連をもつ部分からなる大きなシステムとして捉えられる。それぞれの部分は独自の機能を有し、その機能を果たすことで社会全体に均衡をもたらしている。部分は、不平等の発生や利害の対立など何かの理由でシステムに一時的な不均衡をもたらすこともある。しかしシステムは、部分を構成する人間や集団が、価値観、理念、世界観などを共有しているがゆえに、不均衡を是正して正常な状態に引き戻す能力を有するとされる。それゆえ機能主義では、人種差別、貧困、犯罪などの病理現象も、基本的にはシステムの自律的な作用によって解消可能であることになる。機能主義社会学の目的は、各部分の機能の分析と、不均衡な状態に均衡を回復させる方式の分析を通して、システム全体を理解することにある。

スポーツも、機能主義では全体を構成する部分の一つとして認識される。そしてその機能の分析が主たる課題となる。これまでスポーツの機能は、主として三つの角度から検討されてきた。第一は、社会にとって望ましい価値観や人格を備えた人間を養成する機能である。第二は、参加者や競技者に練習や試合などの共通の場を提供することで、人々を結束させ、統合する機能である。第三は、勤勉や勤労の精神を涵養することで、社会の発展と進歩を促進する機能である。これらの機能によって人は、社会を支えるために重要な価値や規律を修得し、社会秩序の回復と安定に貢献することになる。1950年代以降、機能主義はフィールドワークや統計処理に膨大なエネルギーを費やして、スポーツが実際にこのような機能を有するかどうかを実証しようと試みてきた⁸⁾。

機能主義では、システム全体の均衡が強調される一方、階級的あるいは人種的対立は等閑視される。たとえ存在したとしても、それは部分が一時的に引き起こす不均衡であり、全体がやがて均衡を取り戻すまでの過渡的状況や現象であるとみなされる。そのような現状肯定の楽観主義に真っ向から挑んだものが紛争理論である。紛争理論はマルクス主義に依拠して、社会は権力と資源を有する支配集団が他者を操作し、抑圧することで、支

配集団にとって利益となるような価値や秩序を構築する場であると論じる。紛争理論の社会観は、それゆえ根本的に経済的に利害の衝突する集団によって構成され、強者が弱者を搾取するシステムであることになる⁹⁾。

紛争理論では、スポーツは市場経済の中で作動する巨大な管理体制下にあるものとされる。スポーツは一見、単調な労働を強いられている人々の日々の疲れを癒し、活力源となる。しかし、搾取の現実を直視する目を瞑らせ、労働者が本来傾倒すべき闘争から注意を逸らせてしまう活動でもあることになる。その意味で、スポーツは「阿片」であるとされる。他方、プロスポーツで活躍する有名選手は、巨大資本の製品のマスコットとして販売を促進する道具であるとみなされる。こうしてスポーツは、市場経済において経済的権力を有する支配集団の利益を二重の意味で促進する。すなわち、第一に規律を遵守する勤勉な労働者を創出し、第二に製品販売を促すアイドルやシンボルを提供することによって¹⁰⁾。

紛争理論はこれまで次のような主題を取り上げてきた。第一は、運動選手の、自己の肉体からの疎外に関するものである。勝利至上主義の風潮の中で、運動選手は自己の楽しみや喜びのためではなく、他者に娯楽を与え、利益をもたらすためにスポーツ活動を行なう。肉体はよい記録を生産するための道具であり、機械となる。性能を高めるために自己の命さえ顧みない行為であるドーピングは、その一例である。第二は、スポーツは競技者や観戦者の関心を勝ち負けに集める傾向があり、それゆえ社会、経済、政治上の重要な問題から関心を背けさせるとするものである。第三は、スポーツは大企業や富裕者に巨大な利益をもたらすことによって、そして一般大衆の生活様式や価値観を助成し、消費主義に傾倒させるための宣伝手段を提供することによって資本主義的發展を助長するとするものである¹¹⁾。

紛争理論は経済中心主義に偏り過ぎるとの批判を常に受けてきた。スポーツ愛好国であり、かつマルクス主義に批判的な社会・文化的土壌であるアメリカで、紛争理論が甚だ不人気であったことは想像に難くない。これに比べ批判理論は、1980年代以降急速に人気を集めてきた。批判理論は、

紛争理論を経済決定論の弊に陥りがちであると批判し、現実社会の複雑な仕組みを射程におくにはもっと精緻で多元的な分析枠組が必要であるとす。その思想的由来としては、フランクフルト学派の理論を継承したニューレフトと、イギリスのカルチュラル・スタディーズという二つの経路がある。マルクス主義を源流とする点で紛争理論と同根であるが、批判理論はそれが修正され、洗練された結果、社会の歴史的、現代的秩序や構造を説明する装置として、紛争理論よりもはるかに有力視されているといっよくだらう¹²⁾。

批判理論は社会の秩序と構造に関して、次のような前提を置く。それは人間生活の複雑で多様な歴史的、社会的、物質的条件によって制約されるものであり、機能主義のいう均衡や紛争理論のいう経済的利害対立のような一元的な要因によって形成されたり、動かされたりするものではないと。批判理論は社会生活の複雑性と多様性を前提とするため、そのアプローチは機能主義や紛争理論の全体的、普遍的傾向と著しい対照を成し、個別的、特殊なものとなる。批判理論は、社会生活における権力に特に焦点を設定し、権力が何処から如何にもたらされ、生活のさまざまな側面や状況で如何に発動され、作用するか、生活に影響を及ぼす争点に人々が取組む際に権力が如何に変化するか、などを研究テーマとする¹³⁾。

批判理論のもう一つの特色は、政治的な関与に積極的である点である。批判理論は公正で、多様性に対して開放的な社会生活を構築するための理論として発展し、そのような社会を実現するための具体的なプログラムに応用されてきた。批判理論を用いる研究者の多くは、社会生活をいかに定義し、組織するかについての政治的な闘争にすべての人間関係が根差すことを説明するために腐心してきた。批判理論派の多くは、学術的な主張や提言に基づいた行動をとる社会改革者でもある。

以上のような前提と特色ゆえ、批判理論によるスポーツ研究は次のような特徴を有することになる。第一は、スポーツのあらゆる種目を、それぞれがおかれている歴史的、文化的状況から切り離して分析することは不可

能であるとする、文脈重視の姿勢である。第二は、スポーツを社会的構築物であるとする視点である。スポーツ種目の定義や構成は、時代によって、競技者の所属する集団によって異なるものである。スポーツは歴史、文化、社会の産物なのである。研究の際には、スポーツ競技が形成され、変化する際に誰の思想と概念が優先されたかに着眼することが大切であるとされる。第三は、スポーツを通じて社会を変革することが可能であるとする信念である。スポーツは社会を反映する活動であるのみならず、社会生活が作られる方法や様式に挑み、抵抗し、それらを修正する場でもあるとされるのである。要約するならば、スポーツは歴史的、文化的文脈に応じて創造され、変化する社会的構築物であり、人間の生活を映し出す鏡であるだけでなく人間の生活に改善をもたらすための場でも、活動でもあるといえるだろう¹⁴⁾。

批判理論による研究の一例として、ここではジョージ・セージによる『アメリカスポーツと社会』に言及しておきたい。セージはまず、それまでスポーツ社会学の主流を成してきた機能主義に批判の矢を放つ。機能主義が想定するのは、「経済的、または文化的な深刻な問題や、社会階級と多様な集団との間に差し迫った利害の葛藤がほとんどない社会」であるとし、これを実証的裏付けがないとして却下する¹⁵⁾。セージは社会を、「エリートまたは支配勢力の価値や思想、利益」を擁護し、促進するものと想定し、これを「覇権的」モデルとして提示する¹⁶⁾。彼の批判的洞察の射程は、階級、ジェンダー、人種、マスメディアから、国家、実業界、大学、人格形成などにまで達している。すべての分析に通底する思想は、「スポーツは、支配的イデオロギーを構築し、維持する重要な位置を占めている」というものである¹⁷⁾。以上の分析の後、歴史的な実例を紹介しながらスポーツによる社会変革の可能性を示唆し、将来のスポーツのありかたを展望して、論を結んでいる。

スポーツを通じた社会改革の実践をめざす組織の一例としては、ノースイースタン大学で1984年に設立された社会スポーツ研究センター (Center

for the Study of Sport in Society, CSSS) がある。その機関誌は『スポーツ・社会問題ジャーナル (*Journal of Sport & Social Issues*)』である。創設者の一人リチャード・ラップチックは、ここが「スポーツは社会の病理に対する救済策ではなく、社会の反映にすぎない」とする信念に基づく、スポーツの社会に対する影響を研究する場であると述べている。彼はさらに、スポーツ界の現状を「人種差別、性差別、学生選手の搾取、ステレオタイプの氾濫、実状を報道しようとしめないメディアなど、あらゆる問題の巢窟である」とし、センターを通して「そのような状況の改善につとめてきた」と主張する¹⁸⁾。

近年におけるスポーツ社会学は、機能主義から紛争理論を経由して批判理論へと、分析の枠組を転換してきた。現在の主流派は批判理論である。紛争理論と批判理論は、社会システムの統合と均衡を前提とする機能主義のナイーブさに対する批判的な姿勢を共有するが、スポーツの性質と可能性に対して異なる立場をとる。紛争理論がスポーツを資本主義的搾取体制の一断面であるとするのに対し、批判理論はスポーツが抑圧的でも解放的でもあり、人々を統制することも激励することもあると、つまりスポーツが人間社会にとって悪にも善にもなると主張する。紛争理論が資本主義批判一辺倒に終わる傾向を有するのに対し、批判理論は積極的な改革を志向する。紛争理論が差別や対立を固定的なものであると見なすのに対し、批判理論はそれが可変的であると見なし、その上で、スポーツの将来についての明るい展望を切り開くことに積極的なのである。

第二節：アメリカ歴史学界における動向

歴史学におけるアメリカスポーツ研究の動向は、社会学の場合と同様、研究活動の活性化を第一の特徴とする。社会学でみられた分析枠組の転換も、歴史家の解釈に少なからぬ影響を与えてきた。まず1960年代以前においては、スティーブン・リースによると、スポーツは歴史研究の主題と見

なされず、業績は稀少であったとされる。めぼしい研究は次の3点を数えるのみであった。フレデリック・L・パクソンによる1917年の論文「スポーツの興隆」は、都市の発達に、自然からの隔離という危機感を市民に抱かせ、スポーツへの積極的関与を促したとするテーゼを打ち出した。アーサー・シュレジンガー・シニアによる1938年の著書『都市の興隆』は、スポーツブームの発端が、都市生活が市民に強いた制約や拘束への反動にあったとの解釈を提起した。フォスタ・R・ダラスによる1940年に出版された大衆レクリエーション史は、農村の社会の伝統行事や娯楽が都市生活では実施不可能となった結果、市民は気晴らしのための代替的活動をスポーツに見出すようになったと主張した¹⁹⁾。

これらの先駆的な研究に共通する点は、市民生活の拠点が農村から都市へ移行するなかで、スポーツに対する関心や意欲が高揚したとする主張である。いずれもスポーツに正面から取り組むのではなく、都市化という現象の副産物としてスポーツの起源を考察している。いずれの史観においても主題は別のところにあり、スポーツは副次的な位置を占めるに過ぎない。この点は、スポーツが主題として取り上げるに足らない存在であるという当時の学界の評価を間接的に裏付けるものである。

スポーツという分野が歴史研究において軽視された理由の一つとして、歴史学の領域が狭い範囲に限定されていたことが挙げられる。当時歴史家の大半はアングロサクソン系だった。彼らは政治、外交、経済など少数のエリート層が従事する専門的な分野の活動に研究テーマを絞り、スポーツを守備範囲外に置いた。たかが移民やその子孫の娯楽に過ぎない活動を研究しても、アメリカ史の理解に何も貢献できないとみなしたのである。歴史家としてのキャリアをめざした若者も、学位の取得および就職などで不利に働くことみなし、スポーツを敬遠した²⁰⁾。

しかし1970年代以降、スポーツに対する歴史家の関心は著しく高まった。その理由として、社会や学界における政治・文化的環境のめざましい変化があった。大学は様々な民族集団に門戸を開き、マイノリティ出身の若者

が大学院に進んだ。多様な民族的出自を有する新しい世代の歴史研究者は、自己のルーツを探究する過程でスポーツに対する関心を強め、学術活動の対象として取り上げるようになった。また大学は、学生運動の波を受け、学生の嗜好や要求に応じる方向でカリキュラム改革を実施した。学生の関心が集まるスポーツは、授業のテーマや研究課題として重視されるようになった²¹⁾。同じ時期に歴史学界は「新しい社会史」の興隆を経験し、エリートから大衆へ、ヨーロッパ系白人からマイノリティや女性へ視野を拡大させ、方法論上の新しい様々な試みを実践していた。スポーツ史の隆盛はこうした変化の一翼を担う運動でもあった。リースはこれを、「新しいアメリカスポーツ史」と呼んでいる²²⁾。

スポーツ史研究の変化は、二人のスポーツ史研究者の著述に象徴的に示されているといえるかもしれない。その一人は、1983年の初版以来三度版を重ねる息の長いアメリカスポーツ史の概説書を著わしたベンジャミン・レイダーである。彼は99年に出版された第四版の序文で、最近の歴史学研究の動向を反映させるべく、第二版と第三版の間に大きな修正を行ったと述べている。第二版までは、アメリカスポーツが歴史上いかに発展したかを、段階にわけて説明することに主眼を置いたとする。これに対し第三版以降は、「合衆国の社会・文化的な分裂とスポーツとの関係」を明らかにしようとしたという。ここでいう分裂とは、「ジェンダー、階級、人種、エスニシティ、宗教、地域」などによるものである²³⁾。第二版（90年）と第三版（96年）の間に、スポーツをアメリカ文化の統合の象徴とする立場から分裂と抗争の場とみなす立場へ、レイダーは歴史観を転換したかの印象を受ける。スポーツという活動の連続性を捨象しているわけではないとはいえ、新しい版に描かれるスポーツ史は、種々のアイデンティティの 카테고리によって隔てられた人々の経験の差異を際立たせ、スポーツ経験の多元性と可変性を強く訴えるものとなっている。

もう1人は既に言及したリースである。彼はスポーツ関連の資料集を編集し、1997年に出版した。本書では、全14章中の5章において性、人種、

階級に関連したテーマを設定していることが注目し得る。すなわち第7章「スポーツと階級, 1870-1920」, 第9章「近代アメリカにおけるジェンダーとスポーツ, 1870-1920」, 第10章「アメリカスポーツにおける人種とエスニシティ, 1890-1940」, 第12章「1930年以降のスポーツとアメリカ女性」, 第13章「1945年以降のアメリカにおけるスポーツと人種」である。これらの章では、階級、ジェンダー、人種・エスニシティによる経験の格差と差別の証拠となる様々な一次資料を紹介している²⁴⁾。ここでも、スポーツは古き良きイメージを払拭され、その厳しく醜い現実に光が当てられている。

新しいスポーツ史では、人種やエスニシティによってアイデンティティの異なる集団別の経験が掘り起こされ、記述されるようになった。そのような集団には、アイルランド系、イタリア系、黒人、アメリカ先住民などが含まれる。以下では、これらの集団のスポーツ経験を概観した後、スポーツ史研究の主要な成果について論及するものとした。

アイルランド系は、19世紀中葉までに流入のピークを迎えたいわゆる「旧移民」の中では底辺に位置づけられ、もっとも厳しい差別を受けた集団とされる。アイルランド系にとってアメリカ社会で認められ、出世を果たす手段としてスポーツは極めて重要であった。得意とした種目に「徒歩競技 (pedestrianism)」, 漕艇, 野球, 陸上, そしてボクシングなどがある。徒歩競技では、ダニエル・オラーリー (Daniel O'Leary) が1877年のロンドン大会にて6日間で520マイルを走破し、「世界徒歩競技の王者」と称えられたアメリカ生まれのエドワード・ウェストン (Edward Payson Weston) を破り、優勝した。漕艇の場合、大学などのアマチュア組織はアングロ・サクソン系の牙城だったが、プロ組織ではアイルランド系が支配的な地位を築いた。プロ野球では、19世紀末までに多くの主要なチームでキャプテンを務めるようになった。陸上競技では、第二回パリ・オリンピックで、ハンマー投げのジョン・フラナガン (John F. Flanagan) や M・マックラッケン (M. McCracken) など投擲種目のメダリストを輩出した。

フラナガンはその後二度オリンピックで優勝し、三大会連続で金メダルを獲得した最初の選手となった²⁵⁾。

ボクシングは、アイルランド系の成功の舞台としてアメリカ人の記憶にとりわけ鮮明に焼き付いている。19世紀はアイルランド系ボクサーの黄金時代だった。南北戦争以前の代表的王者には、ジェームズ・“ヤンキー”・サリヴァン (James “Yankee” Sullivan) やジョン・モリセイ (John Morrissey) らがいる。サリヴァンは試合中に星条旗を腰に巻いて闘ったことからこのニックネームを与えられた。そのサリヴァンを1853年に破り、王座を奪ったのがモリセイだった。彼は66年と68年に二度連邦下院議員に当選し、アイルランド系にとってボクシングと政治は同一のものであるとの通説を作るのに一役買ったのだった。南北戦争後のヘビー級王者の多くもアイルランド系だった。その一人ジョン・サリヴァン (John L. Sullivan) は、82年から92年まで王座に君臨し、200もの勝ち星を稼いだ。彼はアメリカスポーツ史上最初のスーパースターといわれる²⁶⁾。

イタリア系の場合、第一世代はニューヨークを拠点として競輪やレスリングなどで人材を輩出した。競輪ではフランコ・ジオルゲッティ (Franco Giorgetti) が全国チャンピオンとなった。第二世代になると、イタリア系のスポーツ参加はさらに活発になった。革新主義時代の教育プログラムによって、バスケットボール、野球、射撃、陸上、サッカー、水泳、テニス、ラクロスなどを学んだ。最も人気を集めたのは野球である。イタリア系初のプロ野球選手フランチェスコ・ペッツォーロ (Francesco Stefano Pezzolo) は差別を避けるためにピング・ボディ (Ping Bodie) と改名し、1911年から21年までシカゴ・ホワイトソックスとニューヨーク・ヤンキーズに所属、.275の生涯打率を残した。大恐慌の時代になると傑出した選手が続出した。その筆頭格は、生涯打率.325、通算ホームラン数361、56打席連続安打などの大記録を樹立したジョー・ディマジオ (Joe DiMaggio) である²⁷⁾。

イタリア系はボクシング界にも躍進したが、多くの選手は差別を避ける

ためにアイルランド系のリング名を採用した。兄弟でチャンピオンとなったサム・ラッツァーロ (Sam Lazzaro) とヴィンス・ラッツァーロ (Vince Lazzaro) はジョー・ダンディー (Joe Dundee) とヴィンス・ダンディー (Vince Dundee) へ、ジャック・デンプシーをノックアウトした唯一のボクサーであるアンドレア・キアリグリオネ (Andrea Chiariglione) はジム・フリン (Jim Flynn) へと改名した。この習慣は、1940年代まで続いたといわれる²⁸⁾。

黒人の場合、南北戦争前の奴隷制下でのスポーツ経験については、ミシシッピー州ナチェスの理髪師ウィリアム・ジョンソン (William Johnson) が残した1835年から51年までの日記が有用な資料を提供する。奴隷たちは、シャッフルボード、ビリヤード、競馬、ラバ競争、闘鶏など様々な娯楽活動に仲間と興じた。奴隷主が主催する奴隷同士のボクシング試合もしばしば開催された²⁹⁾。黒人たちは騎手としても秀でた能力を発揮したといわれる。

再建後になっても、黒人の活躍が最も目立ったのはボクシングと競馬だった。野球などの球技でも有能な選手が出現した。しかし南部で分離主義が合法化され、北部でも暗黙の了解が与えられると、スポーツ界にもその波は及んだ。プロ野球界では、1887年のシーズン中、マイナーリーグのチームの多くが黒人選手を採用したことに對して白人選手が反感を募らせたことがきっかけで、黒人選手は締め出された³⁰⁾。テニスやゴルフの世界でも厳しい人種分離体制が敷かれた。白人による締め出しに對抗した黒人選手は、団結して黒人組織を結成した。テニスでは1916年にアメリカテニス協会 (American Tennis Association) が、ゴルフでは1925年にアメリカ黒人ゴルフ協会 (United States Colored Golf Association) が設立された³¹⁾。アメリカンフットボールでは、33年のシーズンにピッツバーグ・パイレーツのレイ・ケンプ (Ray Kemp) とシカゴ・カージナルスのジョー・リラード (Joe Lillard) がプレーしたのを最後に、黒人選手は排除された³²⁾。

しかし分離主義の時代にあっても、複数の選手が輝かしい記録を残したことは注目に値する。陸上ではジェシー・オーエンスが、1936年のベルリン・オリンピックで100メートル、200メートル、走り幅跳び、400メートルリレーの4種目で金メダルを獲得した³³⁾。ボクシングではジョー・ルイスが、37年にジェイムズ・ブラドックを破ってヘビー級王者となった。黒人がこの座についたのは、1915年にジャック・ジョンソンがジェス・ウィラードに敗れてタイトルを失って以来の快挙だった。ルイスは49年に引退するまで、25回も王座を防衛した³⁴⁾。

第二次世界大戦後になると、分離体制をとっていたプロスポーツ種目で人種統合への端緒が開かれた。フットボールでは、ケニー・ワシントンとウッディ・ストロードが1946年にNFLの選手として認められ、人種の境界線を越えた³⁵⁾。バスケットボールでは、チャック・クーパーとナット・クリフトンが50年にナショナル・バスケットボール・リーグに加わった。野球では、ジャッキー・ロビンソンが47年にブルックリン・ドジャースでデビューを飾った³⁶⁾。

今日までにスポーツ界の制度的な人種統合は実現された。とはいえ、黒人に対する間接的で陰湿な差別は今日も続いている。白人による偏見や閉鎖的なネットワークの存在が、特定のポジションや管理職に黒人を就きにくくする「スタッキング」という現象をもたらしているとされる³⁷⁾。最近、著名人が招いた舌禍の多くは、黒人に対する差別的な暴言が原因である³⁸⁾。黒人運動選手を英雄視する風潮が、黒人青少年に悪影響を及ぼしているとの警告や、黒人の肉体的優越を遺伝的なものとみなす学説やジャーナリズムが、黒人の知的劣等を暗示しているとの警告なども発せられている³⁹⁾。NBAのデトロイト・ピストンズで花形プレーヤーだったアイゼーヤ・トーマスの次のような発言は、社会に浸透する偏見の根深さを示唆するものである。「[ボストン・セルティックスの白人プレーヤー] ラリー・バードが好プレーをすると、彼の頭脳と勤勉さのおかげだとされる。あいつがすべて努力してやったことになる。黒人の場合はそうじゃない。俺

たちがやるのは、ただ走ってジャンプするだけ。俺たちは練習もしなければ、考えもしないと思われている。まるで俺はおふくろのお腹からドリブルして出てきたかのようだ。』⁴⁰⁾

アメリカ先住民の場合、部族の伝統文化と深くかかわる種目で卓越した技能を有していたことが、ヨーロッパ人によって植民地時代から記録されている。その種目とは、球技のラクロスやシーニー (Shinny, 陸上ホッケーに類似した競技)、および長距離走などである。先住民のなかには1日で100マイル以上を走破するものもあったという。また現在のマラソン世界記録に匹敵するタイムで走る長距離ランナーが存在したとの報告もある⁴¹⁾。

19世紀後半になって連邦政府の同化政策が本格化すると、先住民は優れた運動能力を近代スポーツ種目で発揮するようになり、20世紀初頭に黄金時代を迎えた。その立役者の1人は、白人による同化教育の最先端にあったカーライル・スクールに学んだジム・ソープである。彼は陸上やフットボールで鳴らし、1912年のストックホルム・オリッピックに出場して、近代五種と近代十種競技で優勝した⁴²⁾。ルイス・ソックアレクシス (Louis Sockalexis) は、メジャーリーガーとしてクリーブランド球団で66試合に出場し、.331の打率を残した。彼は観衆の野次や罵声を浴び短期間で現役を退いたが、クリーブランドのファンは、皮肉にも20年程後になって、ソックアレクシスに敬意を表して「インディアンズ」というチーム名を採用した⁴³⁾。

やがて様々な要因が重なり、先住民はアメリカスポーツの主役の座を降りざるを得なくなった。カーライルスクールの閉鎖後、先住民のための高等教育機関は衰退の一途をたどった。劣悪化する保護区的生活環境にあって、先住民は非先住民社会への同化を拒否するようになった。日々の生活に追われる人々にとってスポーツは、もはや遠い世界の出来事となってしまったのである⁴⁴⁾。

以上から新しいスポーツ史の成果の一端が明らかとなる。それは、「エ

スニック・サクセッション」と呼ばれる差別の連鎖と、どの時代にも存在してきたより持続的な差別の両者を明らかにしたことである。前者エスニック・サクセッションとは、ある時代の被差別者が次の時代に体制側にまわり、エスニシティの異なる新参者を差別する現象のことを指す。かつてアングロサクソン系に差別を受けたアイルランド系は、新移民が到来した19世紀末になると、オーナーやプロモーターとしてボクシング試合を主催し、イタリア系に対する差別者となった。これに対してイタリア系はアイルランド系のリングネームを採用することで自衛策としたのであった。

後者の例としては、カラーライン（肌の色）に沿った偏見と差別の存在を挙げることができる。アイルランド系やイタリア系が漸次的に体制側に組込まれたのに対し、黒人や先住民は被差別者の地位にとどまり今日に至っている。黒人は既に見たように、現代もお多くの論争の渦中にある。先住民のおかれた状況は一層深刻である。スポーツ界で活躍するための資源や機会さえ与えられず、蚊帳の外におかれているとの印象を拭えない。また、部族名や俗称（レッドマン、レッドスキンなど）をチーム名やマスコットに採用することの是非をめぐる論争も継続中である。最近では、1998年冬季長野オリンピックでの2002年ソルトレーク・オリンピックにむけたイメージ戦略において、先住民の文化と伝統が無視されたとする抗議の声が上がっている⁴⁵⁾。

アメリカスポーツ界では、ヨーロッパ系エスニック集団が時代を下るにつれて漸次的に体制側に取り込まれてきたのとは対照的に、非ヨーロッパ系エスニック集団はいつの時代も取り残されつづけて今日に至っている。メルティングポットの機能は、ヨーロッパ系内部でのみ作用し、非ヨーロッパ系には及ばなかった。肌の色の境界線は、スポーツ史において厳然と存在しつづけてきたのである。

第三節：日本における動向

我が国では、1885年頃から富国強兵政策の一環として、体育教育に道徳や倫理を育成する役割を期待する動きが始まった。その後第二次世界大戦での敗北に至るまで、体育と道徳教育とは「不離不即の関係」にあったとされる⁴⁶⁾。

敗戦後になっても、スポーツを精神的鍛練や修養の場であるとする認識を急変させるような状況は生まれなかった。大衆文化面ではむしろ、伝統的なスポーツ観を補強するような変化が生じた。その一つとして、1960年代から70年代にかけてのスポーツ漫画の流行が挙げられる。これは、少年少女の愛読漫画雑誌に連載された、スポーツを通じて根性を養うことを主題とする一群の漫画のことを指す。今日でも「スポ根」漫画としてしばしば話題に取り上げられる。例えばその代表格『巨人の星』は野球を、『あしたのジョー』はボクシングを、『赤き血のイレブン』はサッカーを、『アタックナンバーワン』はバレーボールを題材としている。若者たちは愛読誌から、人はスポーツを通じて強靱な精神力や死をもおそれない勇氣、熱き友情や堅いチームワークの絆を獲得しうることを学んだ。スポ根漫画の世界では、スポーツはまさに人格形成の舞台だった。このようなスポーツ観は、親から子へと継承され、今日なお少なくない影響力を維持しているように見受けられる。

友添秀則は、1970年代における日本人のスポーツ観を次のように回想している。当時は「フェアプレイの精神やスポーツマンシップが必ずしやすばらしい人間を創らずにはおかない」とか、「公正・正義・不屈の精神・謙虚などの美德がスポーツによって無前提に創られる」とする主張がまかり通っていたと。しかし79年に、彼にとって一つの大きな転機が訪れた。彼の母校筑波大学の体育専門学群生が県議員選挙の買収投票にかかわったことが発覚したのである。これを契機に、彼は実証的なスポーツの倫理的

研究を志すようになったという⁴⁷⁾。

それ以来今日まで、友添はスポーツ倫理の研究者として、「スポーツには人間らしさを破壊する力がある」、「スポーツは人格形成に有害」、「スポーツは人間形成に無効」など、スポーツに批判的な立場をも視座に据えて研究を行ってきた⁴⁸⁾。関心領域は大日本武徳会、メタ理論、ドーピング、剣術等多岐に渡っている。最近では近藤良享との共著で、長年の研究活動によって培った知見を、一般向けに分かり易く紹介している⁴⁹⁾。二人の射程はアメリカの人種問題をも捉えており、その成果はアメリカプロスポーツ界における黒人差別についての調査報告としてまとめられた⁵⁰⁾。

日本の学界全体に視野を広げて、アメリカスポーツ研究の動向を振り返ってみたい⁵¹⁾。主要な業績は、法律、ジェンダー、倫理、歴史などの分野であげられてきた。法律部門では、井上洋一による二つの論文を挙げることができる。一つはスポーツ参加にかかわる訴訟の動向を紹介したもの、もう一つはスポーツへの参加機会の男女平等を保障したいいわゆる「タイトルナイン」成立後の20年間における女性スポーツにかかわる訴訟を振り返ったものである⁵²⁾。川井圭司は、反トラスト法と労働法における移籍の問題を、プロ野球の場合に焦点をあてて考察している⁵³⁾。土田宏は、スポーツ参加における男女差別に関して、異なる判決が下された二つの裁判に焦点をあて、その理由を分析している⁵⁴⁾。ジェンダー研究では、鍛島康子が服装の発展を促す要因としてのスポーツに注目し、1860年から1890年までの女性の服装にみられた変化を、スポーツと関連させながら説明している⁵⁵⁾。倫理学の分野では前出の馬場哲雄が、アメリカにおけるスポーツ倫理研究の20世紀前半から中葉までの動向を、二つの論文で紹介し、分析している⁵⁶⁾。

歴史部門では、まず小田切毅一の業績に注目しなければならない。小田切は80年代に、日本人研究者によるアメリカスポーツ史についての単著書籍としてはおそらく唯一のものである『アメリカスポーツの文化史』を発表し、その後もアメリカスポーツに関する数々の論文を著わしてきた⁵⁷⁾。

最近では、19世紀前半におけるスポーツに対するアメリカ人の態度に関するものがある⁵⁸⁾。ピューリタニズムに起源を有する禁欲主義的伝統がなお残存する社会的風土の中で、当時の人々はスポーツに従事することに対して、「うしろめたき快」と筆者が称する心情を抱いたと、小田切は主張する。このような心的態度を手がかりに、社会秩序と構造が激変する時代にあったアメリカ合衆国の文化的様相を解明しようとする。

歴史部門における組織的活動としては、1986年に設立されたスポーツ史学会がある。同学会は今日までに、機関誌『スポーツ史研究』、会報『ひすば』、ニューズレター『学会だより』などの定期刊行物を出版してきた。機関誌は既に14号を数えている。そこに掲載された論文の主題から、学会の関心の所在を探ると次のような特徴を指摘できる⁵⁹⁾。対象とする地域は日本をはじめとして、中国、フランス、イギリス、ドイツ、アメリカ、ソ連など世界各国に及び、対象とする時代は古代ギリシアから、中世、近世を経て、現代に及んでいる。対象とする競技は、バドミントン、登山、野球、ローンテニス、ボクシング、体操競技、サイクルショー、ホースショー、剣道、スキー、ヨット、闘牛など種々のスポーツを包含している。ここから学会が地域や時代にこだわらず、スポーツという活動全体についての広範な関心を有していることが窺える。アメリカに関する研究についてさらに詳しくみると、次のような事例を挙げることができる。小澤英二による19世紀におけるサイクルショー、ホースショー、アメリカズカップ、オートレースなどについての論文4点⁶⁰⁾、井上洋一によるモスクワオリンピックに対するボイコットについての論文⁶¹⁾、木下秀明によるアメリカズカップについての論文⁶²⁾、小田切毅一によるスポーツについてのメンタリティに関する論文⁶³⁾、そして荻浩三による先住民の球戯に関する論文⁶⁴⁾、などである。

日本人のアメリカスポーツ史理解を強力に促進したものとして、翻訳業績の役割を見落とすことはできない。80年代以降に限ってみても様々な書籍が翻訳されている。まずJ. A. ルーカスによる通史が挙げられる⁶⁵⁾。た

だし、これは原書の第三部のみを翻訳したものである。ピーター・マッキントッシュは、西洋スポーツの精神的柱をなす思想「フェアプレイ」を古代ギリシアに溯り、イギリス、ドイツ、アメリカにおける発展の過程を分析している⁶⁶⁾。明治以来日本には多くの西洋スポーツが移入され、広く実践されるようになったが、西洋スポーツの精神的側面についての理解は不十分である。本書はそのような遅れを取り戻すべく翻訳されたものである。E. A. グレイダーは、アマチュアリズムを歴史的に考察し、その適用における矛盾を鋭くついている⁶⁷⁾。ベンジャミン・レイダーの通史については既に言及した。翻訳されたのは初版の20世紀に関する章部分のみである⁶⁸⁾。ロバート・L・サイモンは、スポーツ倫理の有効性を検証している。スポーツにおける競争の倫理を明らかにし、擁護し、事例に適用した後、参加者の権利と義務の検討を通して「最善の状態で行われるならば、スポーツは、心身共に、刺激的な挑戦となる」との結論を下している⁶⁹⁾。ジョージ・H・セージは、既に述べたように、批判理論に基づいてアメリカスポーツ界を告発している。リチャード・グルノーは、カナダを舞台として近代スポーツの形成と発展を分析している⁷⁰⁾。最新の翻訳書には、R・A・スミスによるものがある⁷¹⁾。大学スポーツの黎明期から確立期までを対象とし、まず種目別、次に大学教員と学生の関係を軸として歴史的考察を展開する。大学スポーツの発展を大学の組織構造とのダイナミクスにおいて解明しているといえるだろう。

以上は書籍の翻訳であるが、論文の翻訳としてはスティープン・リースによる史学史論考を見逃すことはできない⁷²⁾。アメリカの主要な書評誌 *Reviews In American History* に掲載されたもので、研究動向を種目別に紹介し、新しい潮流が出現したことを指摘している。企画立ち上げからすでに7回を重ねた「文書資料に見る『アメリカ体育・スポーツ史』」は、アメリカスポーツ史を学ぶ上で避けて通ることのできない一次資料を紹介し、丁寧な解説を付している⁷³⁾。

以上から、日本の学界におけるスポーツ史研究にどのような傾向を看取

し得るだろうか。まず専攻分野は法律，ジェンダー，倫理，歴史などに分布し，これまでに相当の業績が積み上げられてきたことが明らかとなった。このことは大いに評価できるといえるだろう。しかし，一定の偏りが存在することも否定できない。もっとも顕著なのは，人種を射程にとらえた研究の手薄さである。人種を主題とする研究のほとんどは，翻訳業績によるものである。ルーカスに始まり，レイダー，セージ，リースへと続く研究の流れが，日本においてアメリカスポーツと人種に関する理解を支えてきたのである。

翻訳書の中には，スミスのように人種の問題を扱っていないものもある。その理由は，本書が対象とする時代が19世紀であるのに対し「黒人学生たちが，大学スポーツに進出しはじめたのは，主として20世紀に入ってから顕著になった現象である」からとする。また，彼は別著で人種問題を包括的に取り上げる予定であるという⁷⁴⁾。これに対し日本人研究者が人種を扱わない場合，確たる理由を述べていない点が共通している。敢えて忌避しているかの印象さえ受ける。例えば井上洋一は「スポーツ訴訟」のなかで人種差別を射程外とし，それは「今後の課題」として結んでいる⁷⁵⁾。小田切毅一は『アメリカスポーツの文化史』のなかで，「黒人問題（人種問題）や軍事・政治問題と体育・スポーツといった，アメリカのスポーツ史に不可欠と思われるいくつかの問題に，ほとんど考察が加えられなかった」と述べ，それが「いつわらざる反省点である」としている⁷⁶⁾。スポーツ史学会の活動を瞥見しても，関心の所在が多領域に及ぶがゆえなおさら，アメリカスポーツと人種の間を焦点とする研究の稀少さが，不自然なものとして際立つとはいえないだろうか。

アメリカスポーツを研究する日本人が人種問題を顧みてこなかったのは単なる偶然だろうか。そこには構造的な問題が潜んでいるように思えてならない。この点を探るために，まずアメリカスポーツを研究する場合の，二つの方向性を想定しておきたい。一つは，スポーツ学（スポーツ史学，スポーツ社会学，体育科学，体育教育，体育倫理など関連分野を含む）に

拠点を置き、事例としてアメリカを設定する場合である。この場合、研究者の関心を敢えて位置づけるなら、スポーツが主であり、アメリカは従となるといえよう。もう一つは、アメリカ学（アメリカ研究、アメリカ史研究など）に拠点を置き、事例としてスポーツを設定する場合である。この場合はアメリカが主であり、スポーツが従となるといえるだろう。アメリカにおけるスポーツ研究では、この両者が混在している。けれども日本における研究では、前者が優位にあり、後者の劣位は否めない状況にある。日本におけるアメリカの人種問題の研究が後者を中心として蓄積されてきた事実を鑑みるならば、その劣勢が続く限り、アメリカスポーツと人種についての研究は、なかなか実を結ばないであろう。

冒頭でみたように、アメリカスポーツ界に対する浅薄な理解や、過度の敬意を促す環境が我が国で形成されつつある現状に照らすならば、アメリカスポーツと人種の関係に取り組む研究の不在は、尚一層深刻であるといわざるをえない。このような状況を打破する役割を、果たしてアメリカ研究者は担うことができるのだろうか。

おわりに

エリオット・J・ゴーンとマイケル・オリアードは、アメリカのスポーツ研究の現状を批判的に検討した論考の中で、研究業績の蓄積が不十分な要因として、以下を指摘している。

第一に、カルチュラル・スタディーズにおける「肉体」は修辭的な構築物であるのに対し、運動選手の肉体はあまりにも現実的すぎるからではないか。第二に、我々知識人の本領は知力にあるがゆえ、肉体的なものを扱うのに居心地の悪さを覚えるのではないか。第三に、大学研究者は言葉を糧に生きるが、運動選手の言語は根本的に言葉では表わせないからではないか。第四に、我々は単に、ドル箱である体育系

プログラムを不当に優遇する大学行政に対する積年の恨みを引き摺っているからではないか⁷⁷⁾。

両者の指摘は修辭的に過ぎるきらいがあるとはいえ、大学で活動する研究者とスポーツの関係について示唆に富むとはいえないだろうか。それが現代の日本人研究者にどれだけあてはまるのかは、興味深い検討課題である。

70年代以降、国際的な流れの中で日本でもアメリカスポーツ研究が多くの実りをあげたことは評価に値する。しかしその研究史における人種という視点の相対的欠落は否定できない事実である。その理由がいかなるものであるのせよ、アメリカで隆盛をきわめた新しいスポーツ研究の重要な成果がいまだ日本では十分な注目を浴びていないことに疑念の余地はない。アメリカスポーツと人種についての社会学的、歴史学的研究が、今求められているのである。

注)

- 1) 1996 *Racial Report Card*. Center for the Study of Sport in Society. Jay J. Coakley. *Sports in Society: Issues & Controversies* (Boston, MA: WCB McGraw Hill, 1998 [sixth edition]), p. 268で引用。尚、同カードの最新版である2001 *Racial & Gender Report Card* は三組織の人種的統合状況を評価し、MLBにB、NFLにB、NBAにAのグレードを与えている。<http://www.sportinsociety.org/rgrc2001.html>を参照。
- 2) 伊東一雄「パンチョの予想も超越した怪物イチロー」『イチロー首位打者 Gallop 臨時増刊』2001年11月6日号 10-11頁。
- 3) スポーツジャーナリズムも、スポーツ観の形成に大きな貢献を果たしてきたことはいうまでもない。本稿では、射程を社会学と歴史学に絞らざるを得なかったが、ジャーナリズム研究による業績の蓄積とその影響の検討は、今後の重要な課題である。
- 4) Coakley, *Sports in Society*, p. 96. クーベルタンについては、E・A・グレイダー『アマチュアリズムとスポーツ』不昧堂出版 1986年30頁を参照。
- 5) 馬場哲雄「アメリカ合衆国における体育・スポーツ倫理研究に関する史的考察—1—」『日本女子大学紀要家政学部』36 1989年 155頁。
- 6) 馬場哲雄「アメリカ合衆国における体育・スポーツ倫理研究に関する史的考察—2—」『日本女子大学紀要家政学部』37 1990年 170頁。
- 7) R・ウォーラス/A・ウルフ (濱屋正男他訳)『現代社会学理論』新泉社 1985年 33-38頁。
- 8) Coakley, *Sports in Society*, p. 33.

- 9) R・ウォーラス『現代社会学理論』112-115頁。
- 10) Coakley, *Sports in Society*, p. 35.
- 11) Coakley, *Sports in Society*, p. 36.
- 12) R・ウォーラス『現代社会学理論』142-153頁。なお邦語によるカルチュラル・スタディーズ概説書としては、次の二著がある。吉見俊哉『思考のフロンティア カルチュラル・スタディーズ』岩波書店 2000年。上野俊哉/毛利嘉孝『カルチュラル・スタディーズ入門』筑摩書房 2000年。
- 13) Coakley, *Sports in Society*, p. 42.
- 14) Coakley, *Sports in Society*, p. 43.
- 15) ジョージ・H・セージ (深澤宏訳) 『アメリカスポーツと社会—批判的洞察』不昧堂出版 1997年 28頁。
- 16) 前掲書 29頁。
- 17) 前掲書 39頁。
- 18) Richard E. Lapchick, ed., *Sport in Society: Equal Opportunity or Business as Usual?* (Thousand Oaks, CA: Sage Publications, 1996), xi-xvii.
- 19) Steven A. Riess, ed., *Major Problems in American Sport History* (Boston, MA: Houghton Mifflin, 1997) p. 2. なおこれら三著を本稿の執筆までに入手することはできなかったが、今後できるだけ速く入手し、リースの要約の裏付けを取る予定である。三著は次の通り。Frederick L. Paxson, "The Rise of Sport," *the Mississippi Valley Historical Review* (1917); Arthur M. Schlesinger, Sr., *The Rise of the City, 1878-1898* (1938); Foster Rhea Dulles, *America Learns to Play: A History of Popular Recreation* (1940).
- 20) Riess, *Major Problems*, p. 1. 20世紀初頭におけるアメリカ歴史学界の状況については、拙稿「〈報告5〉 国民国家の形成と国立公文書館—アメリカ合衆国の場合」歴史人類学会編『国民国家とアーカイブス』日本図書センター1999年 140-161頁を参照。
- 21) Riess, *Major Problems*, vii-viii.
- 22) スティーブン・リース (杉本政繁訳) 『新しいアメリカスポーツ史』『大阪体育大学紀要』24 1993年 145-159頁。「新しい社会史」の興隆については、拙稿「『新しい社会史』を越えて—1980年代アメリカ史学における分散と統合」『史境』21 1990年を参照。
- 23) Benjamin G. Rader, *American Sports: From the Age of Folk Games to the Age of Televised Sports* (Upper Saddle River, NJ: Prentice-Hall, 1999 [fourth edition]), vii.
- 24) Riess, *Major Problems*, Chapter 7: Sport and Class, 1870-1920; Chapter 9: Gender and Sport in Modern America, 1870-1920; Chapter 10: Race and Ethnicity in American Sport, 1890-1940; Chapter 12: Sport and American Women since 1930; Chapter 13: Sport and Race in America since 1945.
- 25) Ralph C. Wilcox, "The Shamrock and the Eagle: Irish Americans and Sport in the Nineteenth Century," in George Eisen and David K. Wiggins, eds., *Ethnicity and Sport in North American History and Culture* (Westport, CT: Greenwood, 1994), pp. 55-74.
- 26) Wilcox, "The Shamrock," p. 58.
- 27) Camelo Bazzano, "The Italian-American Sporting Experience," in Eisen and Wiggins, eds.,

- Ethnicity and Sport*, pp. 108-111.
- 28) Bazzano, "The Italian-American," pp. 111-113.
 - 29) Arthur R. Ashe, Jr., *A Hard Road to Glory: a History of the African American Athlete 1619-1918* (New York: Warner Books, 1988), p. 21.
 - 30) Rader, *American Sports*, p. 60.
 - 31) Calvin H. Sinnenette, *Forbidden Fairways: African Americans and the Game of Golf* (Chelsea, MI: Sleeping Bear Press, 1998), pp. 56-57.
 - 32) Charles K. Ross, *Outside the Lines: African Americans and the Integration of the National Football League* (New York: New York University Press, 1999), pp. 43-44.
 - 33) クリス・ミード (佐藤恵一訳) 『チャンピオン：ジョー・ルイスの生涯』東京書籍 1988年 116-118頁。
 - 34) 前掲書 260頁。
 - 35) Ross, *Outside*, p. 96. 拙稿「第27章 スポーツと人種：漸次的、部分的統合と偏見の壁」明石紀雄監修『新版・現代アメリカ社会を知るための66章 (仮題)』明石書店 2002年出版予定。
 - 36) Rader, *American Sports*, pp. 295-298. なお、ロビンソンについては、明石紀雄「第48章 ジャッキー・ロビンソン—最初の黒人大リーガー」明石紀雄/川島浩平 共編『現代アメリカ社会を知るための60章』明石書店 1998年 204-207頁を参照。
 - 37) スタッキングはスポーツ社会学の主要研究分野の一つで、多くの研究成果がある。例えば、Steven Bivens, "Race, Centrality, and Educational Attainment: an NFL Perspective," *Journal of Sport Behavior* 17. 1 (1994); G. L. Gonzalez, "The Stacking of Latinos in Major League Baseball: a Forgotten Minority?" *Journal of Sport & Social Issues* 20. 2 (1996), pp. 134-60等。
 - 38) 1997年4月、マスターズで優勝したタイガー・ウッズに対し、ファジー・ゾーラー (Fuzzy Zoeller) が侮辱的な発言をして物議を醸した事件は、記憶に新しい。New York Times, 1997年4月24日 B9面参照。最近では元アトランタ・ブレイブスのジョン・ロッカー投手の発言が問題となった。ロッカーの差別発言は黒人だけでなく、アジア人、女性、ヒスパニック、同性愛をも対象とするものだった。詳しくは次を参照。Jeff Pearlman, "At Full Blast," *Sports Illustrated*, December 27, 1999, pp. 60-63. なおロッカー投手の発言については、近く出版される拙稿「現代アメリカスポーツと人種—モハメド・アリからマイケル・ジョーダンへ」亀井俊介・鈴木健次 監修『史料で読むアメリカ文化史 (仮題)』第五巻 (東京大学出版会, 2002年出版予定) で詳しく紹介する予定である。
 - 39) 黒人運動選手の英雄視に対して警鐘を鳴らした一人に John Hoberman がいる。Darwin's Athletes: *How Sports Has Damaged Black America and Preserved the Myth of Race* (Boston, MA: Houghton Mifflin, 1997) を参照。黒人の肉体的優越を遺伝的なものとみなす立場から書かれたジャーナリストによる書籍に、John Entine, *Taboo: Why Black Athletes Dominates Sports and Why We're Afraid to Talk About It* (New York: Public Affairs, 2000) がある。他方、ジョン・ベイル (John Bale) とジョー・サング (Joe Sang) は、*Kenyan Running: Movement Culture, Geography and Global Change* (London: Frank Cass, 1996) で、多くの優れた長距離ランナーを輩出したケニアを焦点とし、20世紀初頭にまで溯ってマラソン王

- 国形成の原因を探っている。本書は、エンタインに対する有力な反論になりうるといえよう。なおこの辺の問題については、拙稿「第57章 スポーツと人種—差別は解消されたのか」明石紀雄/川島浩平 共編『現代アメリカ』242-244頁でも言及した。
- 40) David K. Wiggins, "The Notion of Double-Consciousness and the Involvement of Black Athletes in American Sport," in Eisen and Wiggins, eds., *Ethnicity and Sport*, p. 151にて引用。
- 41) 植民地時代の記録については、George Eisen, "Early European Attitudes toward Native American Sports and Pastimes," in Eisen and Wiggins, eds., *Ethnicity and Sport*, pp. 1-18を参照。球技や長距離ランナーについては、Joseph B. Oxendine, *American Indian Sports Heritage* (Champaign, IL: Human Kinetics, 1988), pp. 71-72を参照。
- 42) 前掲書 215-218頁。
- 43) 前掲書 166頁。
- 44) 前掲書 259-269頁。
- 45) 部族名・俗称の採用についての論争は、Lapchick, "The Use of Native American Names and Mascots in Sports," in Lapchick, ed., *Sport in Society* pp. 75-76を参照。ソルトトレイク・オリンピック関連は、Mark Dyreson, "Olympic Games and Historical Imagination: Notes from the Faultline of Tradition and Modernity," *Olympika: The International Journal of Olympic Studies* (1998) pp. 25-41を参照。
- 46) 馬場「アメリカ合衆国—1—」152頁。
- 47) 友添秀則/近藤良享『スポーツ倫理を問う』大修館書店 2000年 11-15頁。
- 48) 前掲書16頁。
- 49) 前掲書。
- 50) 漆原光徳/近藤良享/友添秀則「米国プロスポーツ界における差別問題に関する序論—黒人差別を題材に」『体育・スポーツ哲学研究』12.2 1991年 81-94頁。
- 51) 武蔵大学図書館研究情報センター提供のNICHIGAI/WebServiceによるデータベース「MAGAZINEPLUS」にて検索した。キーワードを「アメリカ」と「スポーツ」と「人種」とし、「雑誌記事索引」と「学会年報・論文集」という二つの検索ファイルで探すとどちらも0件だった。キーワードを「アメリカ」と「スポーツ」の二つのみとし、二つの検索ファイルで探すと、それぞれで135件と26件の該当文献を得た。このことは、アメリカスポーツ研究で人種をみつかったものが少ないことを示唆している。135件と26件のうち内容的に本稿の射程に収まるものは、全体で43件だった。そのうち入手し、目を通すことができたものは18点である。残りの業績は今後入手予定であるが、データベース上の主題、副題などから推察する限りでは、本稿の論旨に矛盾をきたすようなものはみられない。
- 52) 井上洋一「スポーツ訴訟—スポーツ参加にかかわるアメリカの事例を中心に—」『奈良女子大学文学部研究年報』36 1992年 85-100頁。及び「アメリカの女性スポーツ—Title IXの20年—」『奈良女子大学文学部研究年報』37 1993年 123-139頁。
- 53) 川井圭司「アメリカ・プロスポーツの法的問題（1）反トラスト法と労働法における移籍の問題を中心に」『同志社法学』47（4）1995年 1027-1118頁。及び「アメリカ・プロスポーツの法的問題（2）反トラスト法と労働法における移籍の問題を中心に」『同志社法

- 学] 47 (5) 1996年 1458-1500頁。
- 54) 土田宏「スポーツ参加の逆差別訴訟に関する比較研究—アメリカの二つの裁判をめぐって」『高知大学学術研究報告書社会科学』47 1998年 13-20頁。
- 55) 銀島康子「スポーツを通してみた19世紀後半のアメリカのファッション—『Godey's』を資料として—」『実践女子大学生活科学部紀要』35 1998年 77-83頁。
- 56) 馬場哲雄「アメリカ合衆国—1—」, 「アメリカ合衆国—2—」。
- 57) 小田切毅一『アメリカスポーツの文化史—現代スポーツの底流』不昧堂出版 1982年。
- 58) 小田切毅一「19世紀前半期アメリカ人のスポーツに対するメンタリティに関する論議—「うしろめたき快」を中心に」『奈良女子大学文学部研究年報』44 2000年 119-133頁。
- 59) 同学会のホームページ (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jssh/>) より。
- 60) 「[1896年ニューヨーク・サイクル・ショー] についての史的考察」(第2号), 「[1892年ニューヨーク・ホース・ショー] について」(第3号), 「19世紀のアメリカズ・カップ・レースについて—スペクテイター・スポーツとしてのヨット・レースの展開—」(第4号), 「オートレース黎明期のヴァンダービルト・カップ・レースについて」(第6号)。
- 61) 「モスクワオリンピックボイコットに対する訴訟—アメリカにおける競技者の参加の権利—」(第5号)。
- 62) 「[19世紀アメリカズ・カップ・レースについて] の「スペクテイター性」に関する検討」(第5号)。
- 63) 「20世紀への転換期におけるスポーツに対するアメリカ体育家のメンタリティ」(第8号)。
- 64) 「北米先住民族の球戯の地域特性について—S. Culin の調査報告書 (GAMES OF NORTH AMERICAN INDIANS, 1907) を基本資料として—」(第10号)。
- 65) J・A・ルーカス (片岡暁夫編訳) 『現代アメリカスポーツ史』不昧堂出版 1980年。
- 66) ピーター・マキントッシュ (水野忠文訳) 『フェアプレイスポーツと教育における倫理学』ベースボール・マガジン社 1983年。
- 67) グレイダー 『アマチュアリズム』。
- 68) (平井肇・川口智久訳) 『スペクテイタースポーツ—20世紀アメリカスポーツの軌跡』大修館書店 1987年。
- 69) ロバート・L・サイモン (近藤良享・友添秀則代表訳) 『スポーツ倫理学入門』不昧堂出版 1994年。
- 70) リチャード・グルノー (岡田猛・多々納秀雄・菊幸一共訳) 『スポーツの近代史社会学—階級・スポーツ・社会発展の理論とカナダにおける実証—』不昧堂出版 1998年。
- 71) R・A・スミス (白石義郎・岩田弘三監訳) 『カレッジスポーツの誕生』玉川大学出版部 2001年。
- 72) リース「新しいアメリカスポーツ史」。
- 73) 杉本政繁/井田国敬「文書資料にみる『アメリカ体育・スポーツ史』(1)」『大阪体育大学紀要』29 1998年 119-123頁; 杉本政繁「文書資料にみる『アメリカ体育・スポーツ史』(2)」『大阪体育大学紀要』30 1999年 117-125頁; 井田国敬「文書資料にみる『アメリカ体育・スポーツ史』(3)」『大阪体育大学紀要』30 1999年 127-134頁; 杉本政繁「文書資料にみる『アメリカ体育・スポーツ史』(4)」『大阪体育大学紀要』31 2000 59~

66頁；井田国敬「文書資料にみる『アメリカ体育・スポーツ史』（5）」『大阪体育大学紀要』31 2000年 67-76頁；杉本政繁「文書資料にみる『アメリカ体育・スポーツ史』（6）」『大阪体育大学紀要』32 2001 109～114頁；井田国敬「文書資料にみる『アメリカ体育・スポーツ史』（7）」『大阪体育大学紀要』32 2001年115-125頁。

74) スミス『カレッジスポーツ』8-9頁。

75) 井上「スポーツ訴訟」94頁。

76) 小田切『アメリカスポーツ』3頁。

77) Elliott J. Gorn and Michael Oriard, "Taking Sports Seriously," *Chronicle of Higher Education* (March 24, 1995), A52.

*アメリカ史におけるスポーツと人種は、私の現在の研究テーマである。調査結果は逐次ホームページ上で発表している。詳しくは <http://www.musashi.ac.jp/%7Ekokoharu/> を参照のこと。

(2002年1月23日 受理)